講演

# 浄土宗僧侶として社会的弱者に寄り添う

浄土宗の若い僧侶たちによって昨年四月、路上生活者などの社会的弱者を支援する活動に取り組む「ひとさじの会」（浄土宗社会慈業委員会）が結成されました。事務局長の吉水岳彦上人に結成までの経緯や活動内容、そして活動にかける想いを語っていただきました。

＊この記事は、平成二十一年十月一日に開催された「浄土宗研究会」の講演から採録したものです。

ひとさじの会事務局長・浄土宗光照院副住職
吉水岳彦

ご紹介いただいた吉水岳彦と申します。私は浄土宗の僧侶で、東京の浅草にある小さな寺の副住職をしております。浅草というと、浅草寺や繁華街が有名ですが、浅草寺の裏手には風俗街があり、その先には山谷という日雇い労働者の街がございます。この山谷には日雇い労働で生計を立てていた方々が、かつては八千五百人以上いらっしゃいました。しかし、昨今の景気の悪化のなかで二千人以上の方々が路上に投げ出されています。多くはかなり高齢の方たちです。

私たちは、この浅草と新宿を拠点に路上生活をしている方々への支援活動をしています。今日は私たちがなぜこのような活動を始めたのか、そしてその活動のなかでどんなことを学ばせていただいたのかということを、お話ししたいと思います。

## ●新宿夏祭り前夜祭での追悼法要

私たちが路上生活の方々とかかわるようになったきっかけは五年前のことでした。新宿区では毎年八月十五日、新宿夏祭りの前夜祭のなかで、前年の夏から一年間に区内で亡くなった路上生活の方々、あるいは新宿駅のコインロッカーで亡くなった赤ちゃんなどの追悼法要を行っています。昔から行われていたそうですが、二〇〇〇年頃から浄土宗の僧侶が呼ばれるようになり、私ども「ひとさじの会」の会長も二〇〇四年からご回向を行うことになりました。お盆というと、やはり皆さん、僧侶が棚経に来て、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に手を合わせた子どもの頃の記憶を思い出すようで、仲間の供養のために私たち僧侶が呼ばれるのです。

路上生活者の支援活動にかかわっている方々、保健所や医療機関の方々、そして今も路上で生活している人やかつて路上で生活していた仲間が参列し、簡易な祭壇を設けて法要を勤めます。今年（二〇〇九年）は五百人以上の参列者がありました。

新宿区では今、支援する方たちの活躍で、具合が悪くなると早めに病院に運んでもらえたり、もっと早いうちに福祉サービスを受けたりすることもできるようになって、路上で亡くなる人はずいぶん少なくなりました。しかし、それでも路上で凍死する方などがあります。

その場合、どうなるかと申しますと、遺体が救急車で病院に運ばれ、そこで死亡診断書が書かれます。そして葬祭業者に遺体が引き取られます。葬祭業者には行政から「行旅死亡人」として葬祭にかかるお金が支給されますが、東京ではこの額が大人の場合、十九万九千円で、これには遺体の搬送料金の他、ドライアイス、死亡診断書、位牌、火葬容器、そして読経、火葬、納骨などにかかる諸費用が見込まれています。しかし、この金額では実際には位牌も花も供えることができず、業者によっては白木の位牌を使い回していたり、あるいは位牌も花もなく、読経も行われないといったことが通例化しています。火葬も、火葬場の炉が空いているときに機械的に行われ、遺骨も葬祭業者が一定

新宿夏祭り前夜祭での追悼法要（2009年8月15日）
写真提供：福田文昭氏





期間保管しますが、業務用のロッカーにただ並べておくという本当に寂しい形になっています。一人の人間が死後、まるで物を処分するかのように扱われているのです。そして一定期間が過ぎれば、たいてい葬祭業者の無縁墓か火葬場の無縁塔の下に埋葬されることになります。そうなれば、もう自分という存在の痕跡は全く消えてしまうことになります。恐ろしいことです。

こうした事情は、路上からアパートに移り、生活保護を受けながら暮らしている「元路上」の方々が亡くなった場合も基本的に変わりません。新宿には、支援の方々の尽力で路上生活からアパート生活に移った方たちが一千数百人ほどいらっしゃいますが、彼らの多くが親類縁者との関係を断たれていて、遺骨を引き取る人もないのです。

Oさんという、路上生活をされていた方で、今は仲間たちが集まるサロンでコーヒーの焙煎をしているおじさんから、こんな話を聞きました。

「私は、今はこうやってコーヒーの焙煎をしながら、いろんな人たちとご縁をいただき、親しい仲間もできて本当に嬉しく思っている。これ以上望むのはぜいたくかもしれない。でも、もし、ここで知り合った仲間たちと同じ場所に葬ってもらえたら、そして生きている仲間がその墓にお参りに来てくれると思えたら……もっともっとしっかり生きていけそうに思う」

仲間の集まるサロンでの棚経（2009年7月18日）

浄土教には「倶会一処」の教えがあります。死後は極楽浄土でまた会える、ともに仏道修行に励めるという教えです。また法然上人のお言葉には「生けらば念仏の功つもり、死なば浄土へまいりなん。とてもかくてもこの身には、思いわずらうことぞなきと思いぬれば、死生ともにわずらいなし」とあります。死後に往けるところがあると思えるからこそ、人は心を定めて生きている――私はOさんの言葉から、そのことを教わったように思いました。

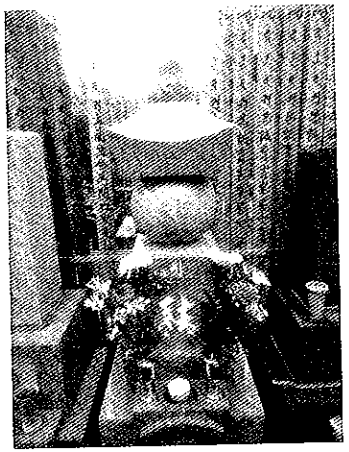
そして、路上生活の方々のための合同墓をつくろうと決意したのです。

## ●葬送支援と合同墓

まず、支援のNPOの方たちや福祉関係者、新宿区の職員の方たち、葬祭業者、そして私たち浄土宗の僧侶などで「葬送支援および合同墓プロジェクト」というものを立ち上げ、話し合いを重ねました。課題は、彼らが亡くなったとき、どういう方法で私たちのところに連絡をもらうようにするか、どういう方法で私たちに葬送や埋葬を任せてもらうようにするか、ということでした。そして次のようなシステムをつくりました。

まず、「自分が亡くなったとき、こういう葬送を望む」、「埋葬はこうしてほしい」という一筆を書いてもらい、公正証書を取ります。そして個別の台帳を作成し、支援を希望する方には「葬送支援カード」を持ってもらいます。公正証書を取って、故人がきちんと意思表示をしていたことを保証し、行政側にも納得してもらった上で、われわれに葬祭を取り仕切らせていただく。また、亡くなったときは葬送支援カードにそって、病院や福祉事務所からわれわれの事務局に連絡が入るようにする――このようなシステムです。

合同墓については、最初はできるだけ大きな墓を建てることを考えていましたが、お骨を粉状にして普通の骨つぼの半分の大きさで納骨することにし、私の自坊の墓地に永代供養塔「結の墓」を建て、昨年（二〇〇八年）十一月に開眼供養法要を営むことができました。さまざまな人との出会いやつながりを縁とする「結縁」と「終結」の両方に共通する一字をとって名づけたものです。この「結の墓」ができたことで、路上の方たちに仲間たちとともに心安らかに葬られる場所ができたという安心が生まれ、心の支えになっていることを、私も側にいて肌で感じています。


永代供養塔「結の墓」

## ●社会慈業委員会――ひとさじの会

このような活動を通していろいろな繋がりができ、支援活動にも従事しているうちに、私たち僧侶も何かできることはないかと思うようになりました。そして、今年（二〇〇九年）の四月七日、浄土宗の僧侶で「社会慈業委員会」というものを立ち上げました。

炊き出しの現場などに支援に出かけると、路上生活をしているおじさんたちから「キリスト教

は本当によく炊き出しをやってくれるが、あんたら坊さんは何もしてくれんな」と、からかわれたりします。もちろん、そう言われて、キリスト教に対抗しようと思って立ち上げたものではありません。路上の現場で私自身が学ぶものがとても多かったからです。

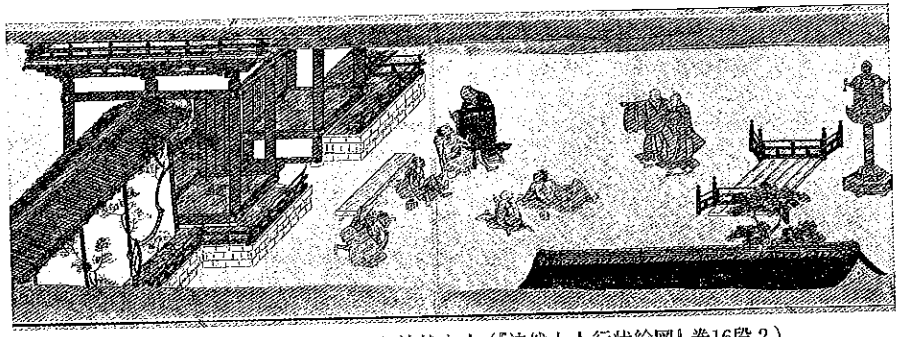
仏教では「無常」や「苦」を見据えることを出発点にします。もちろん、それらを机上で学ぶことも大切です。しかし私にとって、生きることの中に無常や苦があること、それを本当に肌で感じさせられ、納得させてくれたのは路上での体験でした。法然上人が、どうしてあれほど「この世は穢土だ」ということを繰り返し語っておられたのか。そのことも私は路上での活動を通して改めて学ばせていただいたと思っています。

「社会慈業委員会」の主旨は「互いに順逆の縁虚しからずして一仏浄土の友たらん」とおっしゃった法然上人のお言葉にあります。いろいろなご縁があります。いい縁もあれば、逆縁もありますが、どちらの縁であったとしても虚しくはない。必ず一仏浄土、つまり極楽浄土に生まれさせていただくご縁を得た、誰も漏れることなく救われていくご縁を持たせていただいたという自覚を持って、私たち僧侶は人と接していく。お出会いするいろいろな方たちは、みな極楽浄土で再会させていただく人たちだと思い、本当にわずかではあっても慈しみの心を伝えていく――そんなことを願って活動していきたいと思っています。

通称は「ひとさじの会」としました。「社会慈業委員会」という名称は、浄土宗がかつて「社会事業宗」と言われたことをもじり、「事」を「慈」に変えて命名したものですが、もっと覚えやすいものにしてくれという声があって、「ひとさじの会」という名前を考えました。この名前には、食べるのに困っている方々へ、ほんのひとさじの食料を差し上げるばかりの、わずかな支援さえ満足にできない私たちかもしれないけれども、それでも寄り添うことができたら……という思いを込めています。

また、この言葉には、法然上人の伝記に出てくる一つのシーンへの思いも重ねています。それは明遍僧都という高野聖が見た夢の中に登場する法然上人のお姿で、その夢の中で法然上人は、大阪四天王寺の西門わきの路上で、病気で動けない人たちにひとさじずつ重湯を配っておられるのです。これは法然上人が実際にそういうことをおやりになったということではなくて、法然上人のお念仏の御教えが、病み苦しむ人でも食べられる重湯のように、末法の世にあって苦しむ万人を救う教えであることを告げるものであり、また人々の苦しみの現場に寄り添っておられた法然上人のお姿を象徴するものでした。

今、ひとさじの会が取り組んでいる活動としては、「お坊さんの炊き出し」と称して、浅草で路上生活をしている方々に炊き出しをしています。炊き出しにもいろいろな形態がありますが、私たちは商店街を歩いて、路上にいる方たちにおにぎりを配っていく形にしま



明遍僧都の夢の中に現われた法然上人（『法然上人行状絵図』巻16段２）

した。公園などで炊き出しを行うと、近隣住民とのトラブルを生じることがよくあります。そのことを考慮するとともに、炊き出しの列に並べないほど体力の落ちている方、特に寒くなると腰が立たなくなるおじさんたちにも食料や薬を届けたいと思ったからです。

毎月第一・第三月曜日の夕方四時に会場となるお寺に集まり、三つの三升釜でお米を炊いて、米一合分の大きなおにぎりを百八十個ほど作ります。それを薬と一緒にカバンに詰め、五、六人を一グループに夜のアーケード街に出ていきます。先日回ったときには、四十代の方で、二日前に長野から浅草に来て二日間何も食べていないという方と出会いましたが、こういう方には『路上脱出ガイド』というパンフレットなどをお渡しし、生活相談の場につないだりしています。

ひとさじの会の活動目標としては、

一、社会的弱者の支援

二、地域社会・NPO団体との協働

三、寺院僧侶・信徒による公益活動のモデルケースづくり

――を掲げています。

今後の活動としては、お寺の「災害用備蓄米」（注）を利用し、今注目されている「フードバンク」（注）と連携して福祉施設などに食糧を支援するシステムをつくれないかと考えています。

（注）災害用備蓄米……災害時にそなえて備蓄されているアルファ米などの緊急携帯食のこと。災害時のみならず、路上生活者への炊き出しなど、さまざまな支援活動の場面で役立っている。

（注）フードバンク……生活困窮者やDV被害者、精神疾患の人などを支援するさまざまなNPO等へ食品を提供し、その活動を援助している団体。

おにぎりをつくる会のメンバー

## ●阿弥陀仏の願い、法然上人の精神

現在の日本社会にはさまざまな形で「貧困」が広がっています。路上で暮らす方々の中にも「派遣切り」にあい、同時に住む場所も失ったという三十代後半くらいの若い方が目立つようになりました。不景気で会社が倒産し、借金の取り立てから逃れるために路上を転々としている元経営者の方などもおられます。また最近では、ネットカフェや漫画喫茶、カプセルホテルなどで暮らす、いわゆる「ネットカフェ難民」の若い方たちも広義のホームレスと考えられるようになりました。彼らも仕事がなくお金がないときは路上で寝ているのです。

こうした現象は「都市部の一部の現実だろう」とおっしゃる方があるかもしれません。しかし、顕在化するのが都市部なだけであって、実は、彼らの多くは地方や郊外から都市に出てきた方たちです。私は、いつ、誰が、どんな事情で住む家を失い、路上に出て来ざるを得なくなるかわからないのが現代だと思います。

また、精神疾患のために家族から追われた方や夫の家庭内暴力から逃れてきた女性など、現代のホームレスにはさまざまな背景をもつ方がいらっしゃいます。そして、身体や精神に病気や障

害をかかえている方もかなり多くいらっしゃいます。「ホームレス」と聞くと「怠けている人」というイメージを持つ方がまだ多いようです。しかし、私が接していて感じるのは、優しくてまじめな方が多いということです。そういう方たちが経済的な貧困や人間関係の貧困のなかで職を失い、家を追われて路上に出てきているのです。

私たちが「社会的に弱い立場の人に寄り添う」と言っても、もちろん大したことができるとは思っていません。簡単なことでさえ継続できないのが私たちです。善い心を持って頑張ろう、人のために働こうと思っても、何か悪い縁があれば、すぐその気持ちが萎えてしまうのが私たちです。そんな私たちがやることですから限りがあることは知っています。しかし、限りがあるとわかった上でなお、寄り添っていくことが大切だと思うのです。

私にとってその想いのよりどころとなるのは、やはり平等救済を誓った阿弥陀さまの願いであり、法然上人の精神です。

阿弥陀さまは法蔵菩薩として修行をされていたとき、どんな人であっても救い取るという願いを発されました。本当の平等、全くの平等の心に住して菩薩のときの阿弥陀さまが建てられたのが四十八願であり、「私の名前を呼びさえすれば必ず救い取る」という念仏往生の本願でした。そしてそういう阿弥陀さまがいらっしゃるじゃないか、そういう救いがあるじゃないかとお示しくださったのが法然上人でした。法然上人も「一人も漏らすことなく救う」という阿弥陀さまの慈しみの心をいただかれておられたのです。その法然上人の御心にならって、私たちもこの活動を続けていきたいと考えています。



法然上人の八百年大遠忌が間もなく行われます。「すべての人が平等に救われなくて、いったい何の意味があるだろう」という法然上人の想いがあって、浄土宗は開宗されました。私たちは実際に社会的に弱い立場の方に寄り添う活動を通して、そのような法然上人の精神を学ばせていただいているように感じております。社会において実際にどれだけお役に立てるかはわかりません。それでも、私たちは法然上人の御教えをいただく浄土宗の僧侶としてその精神に立ち返り、お念仏の日暮らしの中、みなさまとともに御仏さまがお喜びくださる行いを心がける人とならせていただきたいと願っています。

本当につたない話で恐縮でしたが、ご清聴ありがとうございました。

（了）

## ひとさじの会からのお知らせ

●ボランティア募集

炊き出し・夜回りなどの活動を一緒に担っていただける仲間を募集しています。

○日時：毎月第1・第3月曜日 20：00～

○活動場所：浅草周辺

●賛助会員募集

ひとさじの会では、当会の趣旨に賛同し、その活動を応援してくださる3種類の賛助会員（「ひとさじサポーター」）を募集しています。多くの方のご支援を賜れれば幸いです。

○ひとさじ会員

年会費：1口2000円（1口以上）

○ひとはち会員

年会費：1口1万円（1口以上）

○ひとなべ会員

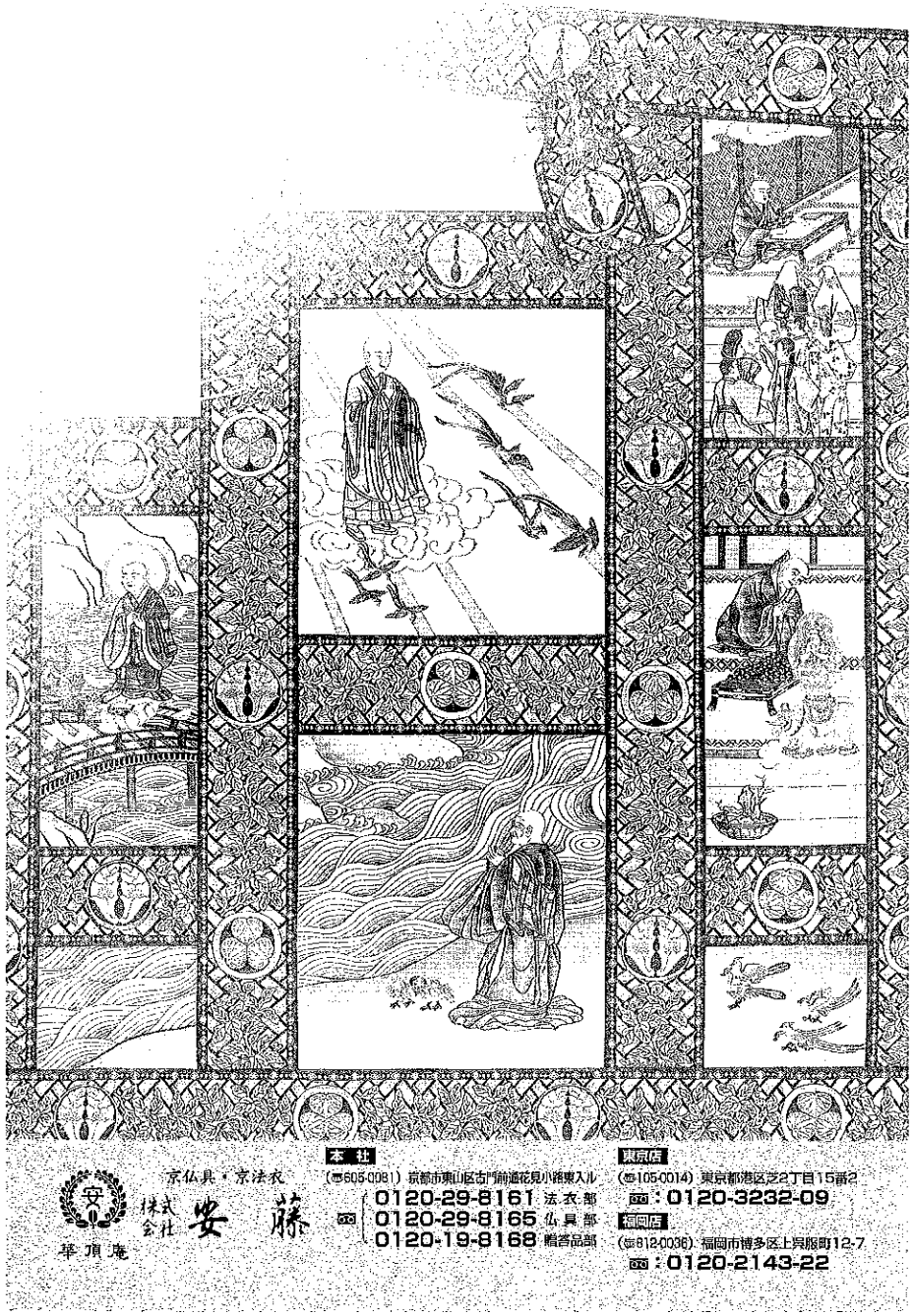
年会費：1口10万円（1口以上）

＊振込先：郵便振替口座
番号：00100-9-484884
名義：社会慈業委員会

●ひとさじの会ホームページ

http://hitosaji.jp/

活動予定、活動日誌、コラムなどを掲載しています。ぜひご覧ください。



京仏具・京法衣
株式会社 安藤
華頂堂

本社
(〒605-0981) 京都市東山区古門前通花見小路東入ル
0120-29-8161 法衣部
0120-29-8165 仏具部
0120-19-8168 贈答品部

東京店
(〒105-0014) 東京都港区芝2丁目15番2
0120-3232-09

福岡店
(〒812-0036) 福岡市博多区上呉服町12-7
0120-2143-22


## 編集後記

◆今月号の巻頭記事のタイトルにある〝寄り添う〟という行為が、各方面で重要視されつつあるようだ。この〝寄り添う〟とは、ただ傍にいるだけではなくて、〝見守る〟ことも伴う。また積極的に働きかけるのではなくて、相手の要求や現状を見きわめ、それに対応していく行為でもある。つまり〝する〟〝してあげる〟ではなく、〝させていただく〟〝させていただいている〟ということになるのであろう。

これの典型が「看護」ではなかろうか。字の示すとおり、〝みる〟ことが重要だと、長年看護に携わった方に聞いたことがある。ただしその方は「人手不足のため、なかなか見守ることができていないのが現状です。これではだめですね」と嘆いておられた。

なお本誌では昨年の七、八月号の巻頭でも、中原実道師の講演録「より添う心――阿弥陀様の大慈悲」を掲載している。バックナンバーを読み返していただければ幸甚に思う。

■『知恩』の定期購読は前金制とさせていただいております。布教誌という性格から、従来より前金切れでも購読中止のお申し出があるまで送本しておりましたが、今年度より前金切れになりましたら送本を中止させていただくことといたしました。請求の振替用紙は、購読期限の三ヵ月前に発送し、ご連絡やご入金なき場合は、一ヵ月前に再度の発送をいたしております。ただし振替は、ご送金いただいてから入金を確認するまで、十日前後を要します。

なお住所変更などは、ご送金の際の振替用紙の記入住所でご訂正をお願いいたします。

●来月号の巻頭は、中村仁一「自分の死を考える会」代表・医師の講演録「自分の死を考える――終末医療の現状と課題(上)」にてお届けの予定です。

(濱)


**知恩5月号** No.792
平成二十二年五月一日(毎月一日)発行

発行人 佐藤諦学
編集人 眞泉善章
編集 浄土宗総本山知恩院 統括企画室
TEL〇七五―五三一―二二〇三
FAX〇七五―五三一―二二三四
デザイン・印刷 ㈱トーヨー企画
発行所 浄土宗総本山知恩院
〒六〇五―八六八六
京都市東山区林下町四〇〇
TEL〇七五―五三一―二二一一(代)
振替 〇〇九二〇―二―一四〇五四九


**読者のみなさんへ**

巻末に綴じ込んであるアンケート葉書に、ご意見・ご感想を書いてお送り下さい。
同じく巻末綴じ込みの払込用紙で有縁の方に購読を勧めて下さい。